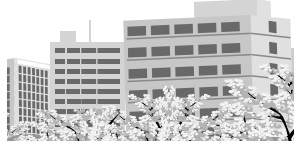
会員の広場



讃・高橋亀吉

松下　滋（東京）

半世紀以上にわたって東洋経済を愛読し、前世紀以来経済倶楽部に通い詰めているが、唯一の不満は、近年、高橋亀吉について語られる機会が少ないことである。

かつての東洋経済を牽引した二本柱のひとり石橋湛山は、立派なジャーナリストだった。私も、敗戦直後に書かれた社論「更生日本の前途は洋々」を、日経新聞・コラム欄への寄稿で引用したことがある。その後転じて、戦後混乱期の首相を務めた偉人である。

では、もうひとつの柱、わが国エコノミスト界の先駆者高橋亀吉（1891―1977年）はどんな人だったのか。生まれは、山口県徳山村（現周南市）の船大工の家。15歳で社会人となり袋物問屋や在朝鮮貿易商で働きながら独学。早稲田大学の商科卒業後、東洋経済新報社編集長を経て経済史の研究家、評論家として独立。戦後も、市井のエコノミストとして活躍し、生涯現役を貫いた。「日本近代経済形成史」「日本近代経済発達史」は78歳から83歳の間に書かれている。

金森久雄氏は、高橋経済学の優れたところを次のように列挙している。①船大工の血筋のせいか職人気質で現実を直視し、具体的なデータから経済史を書いた ②歴史研究の仕方が斬新で包括的であり、経済発展の要因を経営者、労働力、天然資源、資本蓄積の角度から扱った ③優れた理論は積極的に活用し、購買力平価説から旧平価復帰論に反対、早期にケインズ論文に着目していた ④歴史に引きずられず、経済は変化しながら発展するというビジョンを持ち続けた。

こんなエピソードもある。太平洋戦争開戦後まもなく、戦後経済の研究を有沢広巳氏（治安維持法違反容疑で東大休職中）に依頼している。「勝つにしろ負けるにしろ戦後は相当な混乱が予想される。それを誰かが考え用意しておかなければ」と「新橋近くの高橋経済研究所の中に専用の個室と沢山の書物を用意してくれた」（有沢広巳回顧談）。つねに先を見ていた。

国際政治学者高坂正堯氏は高橋の「大正昭和財界変動史」は必読の書と言っていたが、この人の凄いところは、代表的なエコノミストたちが、そろって高く評価していたことだ。高度成長論者下村治氏は、最も尊敬するエコノミストはと問われて「世界では英国のロイ・ハロッド、日本では高橋亀吉」と明言していた。弟分の成長論者金森久雄氏は「世界に誇る大経済学者」と敬意を払い続けた。日銀の安定成長論者・当倶楽部の評議員だった義父・吉野俊彦は、金融政策をめぐってしばしば激しくやり合ったが、歴史的アプローチをもとに現状分析し政策提言する、24歳年長の真摯な姿を敬愛の念を込めて見つめていた。

高橋の魅力は、多角的、複合的な能力にある。VUCA～変動、不確実、複雑、曖昧～の時代を解析し展望するにあたって、学ぶべきことは多い。